

日本文藝學叢刊 第三卷

源氏物語の研究

森岡常夫著



源氏物語の研究

森岡常夫

昭和二十三年十一月二十五日 印刷
昭和二十三年十一月三十日 發行

定價 參百九拾圓

著者

もり つか だ
森岡常夫

岡山市門田一二八九

發行者

久保井理津男

東京御田藪河邊
京野田中西浦町

印刷者

鞍智宣章

東京千代田飯田町

配給元

日本出版配給株式會社

東京御田藪路町



發行所

東京千代田區御田藪河台
會社 電話 A
電話 御田
〇一〇二一〇
六〇七五二
七八五二八
〇三二八

株式會社 弘文堂

(發丁本などに就ては責任をもちます)

序

本書は物語史研究の道程に於いてまとめられた、源氏物語に關する研究を集めたものである。これを分つて四部としたのであるが、本來かやうな組織的な企圖の下に執筆されたものではない。即ちここに收められた研究の中には、既に諸雜誌に發表したものやそれに改訂を加へたものがあり、又新たに書き加へたものもある。従つて執筆の時期にも十年に近い開きがあるが、然し源氏物語を如何に見るかといふ私の立場は常に一貫してゐるのであつて、これは本書に於いて屢々説き述べられてゐる筈である。殊に又一定の企圖に束縛されることなく、思ひの浮ぶままに問題をとらへてゐるのであるから、ここにその點は却つて一層明白に窺はれるであらうと思ふ。

本書の項目について説明を加へれば、先づ第一の「源氏物語の構成」に於いては、源氏物語五十四帖の構成を論じてゐるのであるが、ここで源氏の世界・宇治の世界といふ比較的耳馴れない語を用ゐたのは、正編・續編、前編・後編の語が恰も截然と二部に分離するやうな印象を與へはしないかといふ點を考慮したからである。即ち源氏物語を一作品と見ることに聊かでも妨げとな

るやうな用語は避けたかつたからである。これが單なる私の杞憂にすぎないといふことであれば、それはそれでもよいのであつて、他に格別の意味はない。

第二の「源氏物語の世界」に於いては、源氏物語の世界の問題を考察してゐる。物語は遙かにすぎ去つた理想の姿に對する思慕を描くところに、その根本的な立場が存するのであるが、それはこの世の外のことであつてはならない。殊に紫式部は遙かな理想を憧れると共に、鋭く把握された現實に立脚してゐるのである。これこそ源氏物語に於いて眞の理想主義が樹立された所以であらう。かやうな意味でここには源氏物語の世界の兩方面の研究を試みたのである。

第三の「源氏物語の表現」に於いては、先づ源氏物語の對照的表現やその省筆について考察してゐるが、これらは或は特殊な修辭的技巧のやうに見えるかも知れない。然しこの問題を掘り下げて行けば、當然紫式部の藝術的精神に觸れるものがあると思ふ。次に源氏物語の自然は、それが如何に深い詩趣を漂はしてゐるかを考へて見るだけでも興味ある問題である。ここでは自然が如何に扱はれ、如何に美として表現されてゐるかを主として考察したのである。

第四の「源氏物語の内容」は、これを更に三種に分つことができる。先づその一は「あはれとをかし」「なまめかしとえん」「すごし」であつて、最も本質的な文藝美とも言ふべきであらう。

源氏物語の中にはあはれやをかしとは稍異つた美の諸相があるやうに思はれて、「なまめかしとえん」や「すごし」の研究を試みたのであるが、この種の美は今後更に廣く開拓されなければならな
いと考へてゐる。その二は「宿世」と「本意」であるが、これらは源氏物語に見える佛教思想の
代表的な問題として取り上げたのである。源氏物語が佛教的人生觀を骨子として成立してゐるこ
とは言ふまでもない。従つてこの點を究明することによつて、側面から文藝精神に觸れようとす
るのである。然し源氏物語を單なる材料として佛教思想を論ずるものではない。その三は日記的
性格と和歌的精神である。これらは物語の日記や和歌との交流接觸を述べて、源氏物語の日記的
性格や和歌的精神を指摘したのである。更に物語的特性に關する一論文を加へたいと思つたが、
紙數の都合で省略した。然し日記的性格・和歌的精神の二論考の中で物語的特性に論及し、物語
が日記や和歌を取り入れることによつて、自己を豊かに生かしてゐることを述べて置いたから、
その點は十分理解されることであらうと思ふ。

最後にこれら四部の配列の順序は、外部的な構成から次第に内面的な精神に進む方向をたどつ
たつもりであるが、然しいづれも内面的な問題に觸れて來るのであるから、便宜的と言へば或は
言へるかも知れないし、私自身この點に深く拘泥する意志は必ずしもないのである。

物語は青春の文藝である。さうして本書は私が青春の思ひをこめて書いたところであるから、研究途上の一書にはすぎないが、私としては多少の感慨なきを得ないのである。夙に出されるべきであつたが、戦争中の騒然たる空氣の中に遷延し、更に終戦後の道義の頹廢は、郵途中の本書の原稿を紛失せしめる結果となつて荏苒今日に至つた次第である。

今や日本文藝の美の傳統は、殆んど忘れ去られようとしてゐるかに見える。殊更にそれを否定して以て快なりとするやうな言説も多く、又この方が世間の反響も花々しいやうである。然し眞に古典と言ひ得るやうな作品である以上、如何にいちめつけられても黙々として永遠の生命を生き續けて行くに相違ない。この點を無視して文運の復興、果して望み得られるであらうか。かやうな意味に於いて日本文藝美の本源を探らうとする私の微意が、本書に於いて聊かなりとも認められるならば、幸ひこれにすぎるものはないであらう。

出版の容易ならざる現在、本書が世に出ることを得たのは、全く恩師岡崎義恵先生の御厚情御高配によるものである。ここに記して心から感謝の意を表する次第である。

昭和二十三年九月

操山の麓にて

森岡常夫

目次

序 一

源氏物語の構成 一

源氏の世界の構成 三

宇治の世界の構成 三

源氏物語の世界 六

源氏物語の世界 六

宇治の世界の中世的性格 七

紫式部日記の世界 七

——宇治の世界との聯關——

源氏物語の表現	一三
---------	----

源氏物語の對照的表現	一五
------------	----

源氏物語の省筆	一七
---------	----

源氏物語の自然	一七
---------	----

源氏物語の内容	一九
---------	----

あはれとをかし	一九
---------	----

なまめかしとえん	二四
----------	----

すこし	二五
-----	----

宿世	二五
----	----

本意	二六
----	----

日記的性格	三〇
-------	----

和歌的精神	三四
-------	----

源氏物語の構成

源氏の世界の構成

一

物語はある人の物語である。従つて人物が事件以上に重大なる契機として構成力を有してゐることは、小説的作品一般の中に於いても特に著しい現象であると思ふ。さうして源氏物語は殊に光る源氏の世界に於いて、かかる特質を遺憾なきまで發揮したものと考へられる。

源氏物語の構成は、作者に最初から全く腹案がなかつたのではないであらうが、その世界は枝を出し葉を伸ばし主人公光る源氏と共に生長してゐるのである。そこには極めて自然な生命の展開が認められるのであつて、作者が一定の構成的企圖を強制してゐるとは見えない。然しこれはその世界に作者が深く沈潜するといふ物語の根本的な性格に基づくものであつて、又一種の構成であると思へられよう。

先づ光る源氏の世界を青年・中年・晩年の三期に區劃して考察することについては、何人も異

論のないところであらう。さうして青年期は源氏・右大臣派の對立が、やがて右大臣の他界等によつて源氏の勝利に終結してゐるし、又中年期は源氏・頭中將の對立が頭中將の敗北によつて圓滿に解決し、續く晩年期は女三宮事件及びその餘波なのであるから、それぞれ一應まとまつた世界である。これらについてその特色を挙げれば、青年期は事件、中年期は生活、更に晩年期は宿命を主として描いてゐると考へられる。然もこれらの各期は時間的に或は事件的に連結するといふだけではなく、光る源氏の境地の展開或は宿命の起伏といふやうな内面的又は有機的な統一を有してゐるのであつて、歴史的或は日記的敘述を基礎としながらもその上に物語的構成を創造してゐると思ふ。従つてそれは事件を絡み合はすことによつて練り上げたやうな緊密さは認められないが、然し必ずしも散漫であるとは考へられない。部分はそれぞれ生きつつ、然も全體に參與して恰も一箇の生命體の感がある。伊勢物語の如く單純に斷片的なるものではなく、落窪物語の如く素樸に構成的なるものでもないところに、その特殊性を認めなければならない。これは各卷々の聯關を注意することによつて、一層闡明されるであらう。即ちそれは極めて變化に富むものであつて、たとへば帚木・空蟬や須磨・明石或は若菜上下・柏木等の如く、時間的にも事件的にも極めて密接に聯絡してゐる卷々もあるし、又夕顔・末摘花・蓬生・權等の如く、前後から比

較的に獨立してゐる卷々も認められる。更に一事件の一環をなす卷々でありながら初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分の如きは、自然の風趣が卷を設定する材料として與つてゐるのである。或は又桐壺・帚木、幻・匂宮、或は藤袴・眞木柱、浮舟・蜻蛉等の卷々の間には時間や事件の省略が認められる。その他橋姫や手習の卷の如く、筆を改めて新しく出現する人物から書きはじめることもあれば、又藤袴の卷の如く、行幸の卷の末の尙侍になることを熱望する近江君に對して、尙侍になることを苦慮する玉鬘の心境から書きはじめるといふ、特殊な連絡も存して誠に多様であるが、然し各卷々は概して整つた焦點、纏つた印象を有してそれぞれ獨立性を帶びてゐることは否定できないと思ふ。たとへば紫上は若紫の卷から御法の卷に至るまで常にあらはれる女主人公であるが、然し若紫の卷は、可憐な彼女が光る源氏に見出されて二條院に引き取られるまでを描き、又御法の卷は、悲痛な彼女の死を寫してそれぞれある程度の纏りを有してゐると考へられる。従つて卷々の切り方は決して機械的な或は便宜的なものではなく、紫式部の深い藝術的苦心の存するところであるに相違ない。素より料紙の乏しい當時、作者は料紙の手に入る毎に一帖づつ書き、讀者も手に入る毎に一帖づつ讀むといふ實情に適應させる必要もあつたに相違ないが、然しそれを外部的なる事情のみに歸することはできない。すべての卷々はそれぞれ生命を有する

美的世界である。

然し各卷々に描かれた源氏をめぐる人々を中心として考察するとき、その統一性は或は見失はれるかも知れないが、光る源氏の存在を輕視することは、源氏物語の構成を深く理解し得る所以ではない。たとへば玉鬘の卷には、玉鬘が主として活躍するのではあるが、然し實は上京した彼女が六條院にをさまつて、源氏の世界の人となるに至る事情の説明に、この卷の存在の意味があると思ふ。或は夕霧の卷にしても、夕霧と落葉宮の交渉が主題となつてゐるのであるが、夕霧は柏木の親友であり、落葉宮は柏木の妻であると共に女三宮の姉であるから、女三宮事件の餘波であると思へられる。従つてこの卷も源氏の世界から切り離し得ないのであるが、更に源氏は夕霧に言ひ寄られる落葉宮の姿に、わがなき後の紫上の宿命を思ふのであつて、夕霧の卷の世界はここに於いて源氏晩年の境地に深く喰ひ込んで來てゐると言はなければならない。かやうに比較的孤立してゐるやうに見える卷々であつても、實は源氏の世界に根柢を有してゐるのである。更に宇治の世界は源氏晩年期の發展であるが、源氏に對する追慕の情が常に流れてゐるのみならず、菫や匂は源氏の分身として生きてゐる。従つて幻の卷は源氏の世界の終結を示すのであるが、然しそれが續く宇治の世界と截然と分ち難いものであることも明白である。或は又卒蟬・關屋、夕

顔・玉鬘、末摘花・蓬生等の卷々は、それぞれ多くの卷々を隔てて直接聯絡してゐるのであるから、これらは空蟬、夕顔・玉鬘、末摘花を中心とする一系統の話として一應獨立性が認められるであらう。然しながら空蟬・夕顔の二卷は、共に雨夜の品定めに於いて啓發された光る源氏の清流女性への關心に基づくものであり、末摘花の卷は夕顔の再來を求める心から引き起された失敗として、源氏の若き日の姿を示すのである。又蓬生・關屋の二卷は源氏歸洛後の動靜、玉鬘の卷は源氏中年の生活に觸れるものとして、それぞれ所を得てゐるのである。即ちそれらの卷々は源氏の生活を中心として結びついて、前後の卷々とも自然に聯絡してゐると思ふ。かやうに各卷々或は各系統の話が一面に於いてそれぞれの世界を有しつつも、源氏を中心として渾融してゐるところに源氏物語構成の本質があると思ふ。素より物語に於いては、時間も構成の原理として與へることは否定できないが、然し日記に於ける程それが壓倒的であるとは思へない。人物が支配的なのである。源氏物語の所謂並びの卷の如きは、かやうな事實を端的に表現するものであらうと思ふ。

光る源氏の世界を各時期に區劃して、その構成を考察したいと思ふ。先づ青年期は桐壺の卷に於ける彼の出生から明石の卷に於ける歸京までである。この世界の主題が源氏のなき母に對する思慕の心から發展した、藤壺・紫上を結ぶ愛の一線に存することは言を俟たない。然し桐壺の卷の成立については、須磨・明石の卷から書きはじめられたとする河海抄以來の傳説は別としても、この卷が最初の執筆ではなからうといふ説が存在する。然しながらその主題を考慮に容れるならば、桐壺の卷はその發端として應しいのみならず、缺くべからざるものではなからうか。たとへこの卷の執筆が比較的遅れてゐるとしても、かやうな順序にまとめ上げられてゐる以上、その成立の遲速を論ずることは、構成の問題として意味の乏しいことであると思ふ。卷を開いて先づ繰りひろげられる桐壺の愛の世界は、やがて生れ出づる光る源氏の人柄を決定する條件として重大なる意味を有する。かくて源氏のなき母への幻想は、藤壺への道ならぬ戀慕ゆかりの色の紫上との結婚となつて、現實の愛情に生長するのであるが、然しながら源氏の青年期はかやうな